

# 經濟論叢

第136卷 第1号

---

経営戦略論に関する若干の考察 (4).....	降旗武彦	1
いわゆる「植民地物産」について (4).....	渡辺尚	35
「ラディカルな欲望」について.....	神谷明	61
技術革新と制限的慣行.....	川口章	80
1800年前後における英領インドの拡大と イギリス東インド会社.....	今田秀作	99

---

昭和60年7月

京都大學經濟學會

# いわゆる「植民地物産」について

—本源的蓄積の商品史的検討(4)—

渡 辺 尚

## II 18世紀後半

### 2 ベックマン『商品学序論』(1793—1800)

#### ⑤ 製紙原料

古代エジプトのミイラを包む布が亜麻か綿かを論ずるために2ページを割いた後、ベックマンは製紙原料としての綿の検討に移る。ここでは当然のことながら、伝統的にドイツにおけるもっとも重要な製紙原料であった亜麻との対比に、焦点が当てられる。染色を論ずる際に綿と羊毛を対比し、製紙を問題にする際には綿と亜麻を対比して、伝統的の二大天然繊維にも一瞥を与えるというベックマン特有の叙述様式は、ドイツの伝統的繊維材料と綿という外来材料との相互代替の可能性に、かれが強い関心を抱いていたことを窺わせるものである。また、衣料材料と製紙材料とが同一であり、紙が衣料の再生品の形をとったドイツにおいて、製紙業が織物業と日本におけるのとは異なる産業連関を結んでいたことを、あらためて想起させもする。かれは次のように言う。

「ここでついでに、古文書学者 *Diplomatiker* や文筆家 *Kritiker*<sup>1)</sup> からの、手書文書 *Handschrift* は綿紙なのか、亜麻紙なのかという間に答えることは、普通に思われているよりもはるかに困難で不確実であるとわたくしが考えていることを、告白させて頂きたい。わたくしはこれについて、完全に自信をもって断定することが不可能であると言いきるのを憚らない。たとえ

1) *Diplomatiker, Kritiker* の項目はツェードラーにもルドビーチにも無く、18世紀における用語法がさだかでないため、それぞれ「古文書学者」、「文筆家」と仮訳しておく。

手書文書の目次には用紙の種類がたしかに挙げられてはおり、その断定のためには、健康な眼以外の何ものをも必要としないかのようなものであるにしてもである。古い、ざらざらした *rauh*、しかし柔い紙を綿紙と呼ぶことでは皆一致しているかのようだ。もし古い手書文書をいささか問題にするならば、古文書学者がこれまで好んで使ってきた、この【綿紙という】呼称の巧妙な使い方を知る。そういうことになれば、何が綿【紙】と呼ばれるべきかについては容易に識別ができるというものだ」(S. 58-59)。

じつにもってまわった表現ながら<sup>2)</sup>、古文書用紙の材料が従来は綿であるとされてきたことに対して、ベックマンが強い疑問を抱いていることが表明されている。続けて言う。

「とはいえ、このような性質を持つ紙がかならず綿紙であるはずということ、だれが立証することができるのか！ この難点を見過ごすことのできなかった何人かの良心的古文書学者は、化学者たちに助けを求めた。しかし、この問題で後者が役に立ちうとは思われない。綿と亜麻はその成分がそれほど明瞭に区別することのできない植物性繊維からできている。その上、製紙に必要な浸漬、粉碎、加工を経てきているのだからなおのことである。たしかに、わたくしたちが通常使用する紙は綿を加えると柔く、ふわふわし *lockerer*、ざらざらしてくる。その多くの種類を知っており、その性質が加工の仕方によってどの程度影響を受けるのかを知っている者だけが、一定の状況下では亜麻紙が綿紙に酷似してくるので、何らかの区別が不可能になるということに疑わないのである。加うるに、しなるペンを使いたがるヨーロッパ人のために綿紙をもっと *fester* とし、滑らかにする技術が、かつて知られていなかったかどうかは分からないのである」(S. 59-60)。

ベックマンは、従来綿紙とされてきたものが実は亜麻紙ではないかという強

2) わたくしたちはベックマンの著述の中で、このような回りくどい表現にしばしば出会うのだが、それは論理の微妙な屈折を可能なかぎり正確に表現しようとする学問的努力よりも、むしろ、予想される反論に備えた論争技術上の韜晦を感じさせられる。これまた18世紀カメラリストの文体というべきか？

い疑いを抱いているのだが、そのことは逆に、18世紀末のドイツにおいて主要な製紙材料が依然として亜麻であったとしても、事実上は綿も製紙材料として、すでに長期にわたって併用されてきたことをも示唆するものである。元来ドイツにおいて製紙原料はぼろ Lumpen, Hader であった。すなわち、生産過程で発生する糸屑や端切れ、また耐用期限が過ぎて衣料、家具、寝具、調度品としての使用価値を失った繊維製品を、とりわけ文字を配列する基箔、つまり情報媒体として再生させる廃物利用工業としてドイツ製紙業は成立したのである<sup>3)</sup>。綿織物の消費が増大すれば、これを製紙原料として再利用しようとするのは当然の成行きであろう。ただし、ベックマンは『技術学入門』の中で「製紙業」に一章を割き、製紙工程について詳説してはいるものの<sup>4)</sup>、ここでは亜麻を原料として叙述がなされており、綿紙については附注で触れられているにすぎない<sup>5)</sup>。したがって、『序論』の、製紙材料として綿を論じた部分と、『技術学入門』の第5章とは、相互補完関係に立つものとして読み合わせられるべきである。

製紙材料一般について、ベックマンは次のような概観を行っている。

「最初の紙がつけられたアジアでは、昔からさまざまな植物を、しかも各地域でその地でもっとも容易に入手しうる植物を製紙用に利用してきた。デ

3) ベックマンは『技術学入門』の「製紙業」の冒頭でこの点を強調している。「亜麻のさまざまな加工、再加工、利用、使古しの後で棄てられたぼろは「ぼろ回収業者」Lumpensamler によって回収され、13世紀初以来あらゆる種類の紙に再生するようになった」。Beckmann, *Technologie*, S. 152. なお、前稿の注14)に紹介したように、ベックマンは「手工業の自然的分類」を試みているが、第24部門が製紙業および関連工業であり、136.製紙、137.厚紙製品、138.人形・仮面、139.時計の側、箱、鞆、140.混糞紙製品、141. Fichtelmacher [菓子製造業者か?], 142.製本、の7種が挙げられている。Ebenda, S. 34. ただし壁紙だけは綿布捺染、銅版印刷、書籍印刷等とともに第9部門に含まれている。Ebenda, S. 30. 風巻、前掲書、173-174ページ。ちなみに、『論集』の中で材料としての紙に関連する項目は「壁紙」だけである。ここでは文頭で、三種類の壁紙のうちもっとも簡素なものと同種の木版が使用されていると指摘され、壁紙製造と綿布捺染業との技術的共通性にベックマンが関心を向けていたことが窺われる。Beckmann, *History of Inventions*, Vol. 1, p. 379 [邦訳、II, 514ページ]。

4) Abs. 5. Papiermacherey, S. 152-177.

5) 第14節で「亜麻」ぼろの代替原料が論じられているが、その注(1)の中に次のような言及が見出される。「ベルシャでは綿ぼろから紙が造られ、これはガラス玉によって平滑にされ、当地で用いられるインクが「一層よくなじむ」desto besser darauf fliesse ように石鹼? が塗布される。綿紙と亜麻紙の相異については『序論』I, 58ページを参照」と。Ebenda, S. 174.

ユバルド Dubalde は、アラビア人が紙を初めて知ったボハラ Bucharey [ボハラ=ハン国 Bukhārā Khān (1599-1920). 中央アジア・ウズベク族の三ハン国の一。1924年他の二ハン国とともにウズベク共和国となる。この地域が今日、ソ連邦における綿花生産の中心地であることに注意] で、紙が竹 Bambusrohr からつくられたと保証している。フェルク Falk はボハラでは桑の木の鞣皮やさまざまな根からつくられた紙を見たと言うし、最上質紙は綿からつくられたと言う。この最上質紙は白色で、膠が添加され、滑かにされた。中国でこのためにきわめて多様な植物が利用されていることは、中国産紙のすばらしい多様性を見れば一目でわかることだ<sup>6)</sup>。日本では下級紙は白い桑の木の鞣皮から、最上質紙は *Morus papyrifera* の鞣皮からつくる<sup>7)</sup>。

- 6) この叙述に対応する『技術論入門』の叙述は以下の通り。「中国人はつとにありとある植物を、とりわけ種毛 Samenwolle を製紙に利用しており、このことは H. パラスの厚意によって入手できた中国紙の標本が証明するところである。これに対して、普通信じられているように中国人が網のぼろ切れ Abgänge からも紙をつくるというのは誤りである」。S. 174. 中国における技術全書ともいべき『天工開物』(1637年)中巻十三の「製紙」の章によれば、紙の材料として楮樹 [カジノキ] の皮、桑糞 [桑皮]、芙蓉膜 [木芙蓉の樹皮]、竹麻 [竹の繊維] が挙げられている。なお、楮皮を材料とした堅い紙は縦にさくと木綿糸のようにになるので綿紙と呼ばれたという。それゆえ、少なくとも17世紀半頃までは中国で綿紙と呼ばれたものの材料は楮であったということになる。宋應星撰・蕨内清訳注『天工開物』東洋文庫130, 平凡社, 1969年, 245-257ページ。なおこれの訳註によれば、コウゾは中国にはなく、したがって楮にコウゾをあてるのは誤りであるという。たしかに、小倉謙監修『増補・植物の事典』東京堂, 昭和43年, の「コウゾ」の項目でも、「楮の漢字はコウゾと読ませているが、中国ではカジノキに当てている」と指摘している。しかし、牧野富太郎はくわ科コウゾ属に属するコウゾ、ツルクコウゾ (ムキミカズラ)、カジノキの三種のうち、コウゾの分布地を本州、四国、九州、琉球、台湾、朝鮮、中国の暖帯と明記し、カジノキについては「アジアの暖帯から熱帯に分布」と記している。また、かれは後者の漢名として楮、構、毅を挙げてもある。牧野富太郎『原色牧野植物大図鑑』北隆館, 昭和57年, 30ページ。また他の資料も、コウゾとカジノキを区別した上でコウゾの自生地として牧野と同様に台湾、中国をも挙げてある。日本林業技術協会編『新版・林業百科事典』丸善, 昭和46年, 「コウゾ」項目を参照。こうしてみると、中国の楮をコウゾと読むことの可否はさしあたりなお保留せざるをえないばかりでなく、中国には楮がないという蕨内の断定は正確さを欠くと言わざるをえない。
- 7) ベックマンはここでツェンペリー Karl Peter Thunberg (1743-1822. リンネの弟子。オランダ東インド会社船医として安永4年 [1775] 来日。帰国してリンネの死後ウプサラ大学でその後を継いだ。リンネを介してベックマンは日本につながる。) の *Flora iaponica*, Leipzig 1784 (筆者未見), を引用しているが、「白い桑の木」と *Morus Papyrifera* が具体的に何を指すのかを確定することは難しい。和紙の主要材料は今日、コウゾ、ミツマタ、カンビであるが、コウゾはくわ科 *Moraceae* に属し、またクワ属 *Morus* のクワ *Morus bombycis* Koidz. (牧野, 前掲書, 29ページ) の鞣皮も和紙の原料となるからである。小倉, 前掲書, 「クワ」項目を参照。一般に品質 (とりわけ強度 [繊維長]) ではカジノキはコウゾに劣り、ミツマタもまたコウゾに劣

及ばないが、カジノキとミツマタとの優劣はさだかでない。ガンビからは最高級紙(烏子紙)が抄造される。しかしこのような比較から上述の疑問に対する答えが引き出されるわけではない。そのためにはおそらくツェンベリーの叙述の検討に待つほかはないであろう。ただ、上掲『林業百科事典』によれば、カジノキの独名が *Papiermaulbeerbaum*、英名が *Papermulberry* などで、「白い桑の木」は文字通りタワを指し、*M. papyrifera* はコウゾないしカジノキを指すとさしあたり解釈しておくことは、あながち無理ではないように思われる。ちなみに、江戸時代に出版された『農書』において製紙業がどのように扱われているかを一瞥すれば、元禄10年(1697)刊行の宮崎安貞『農業全書』では巻七の四木之類の第二に楮(かうぞ、かご)を挙げていて。かれは冒頭で、「楮にハ其種色々あり。其内先葉に切こみ深くあるを楮と云。切めなきを。構と云」と述べ楮と構とを区別しているが、コウゾもカジノキも若葉には深い切込みがあるので、構が何を指すのかさだかでない。他の製紙原料についての言及はない(京都大学経済学部所蔵の財部文庫・天明7年再板(1787年)を参照)。しかし、幕末に近い天保3年(1832年)刊行の佐藤信淵『草木六部耕種法』ともなると挙げられる種類も豊富である。巻七「需皮全篇」で信淵は製紙材として楮、檀、三又木一名結膏の3種を挙げ、楮の多種にわたることを安貞と同様に指摘して、次のように述べている。「楮 樹ハ種類頗ル多シ 其ノ中ニ於テ諸國ノ多ク作者ハ白表、青表、黒表、鯨尾、縹垣、男世、麻葉、門葉、目高等ナリ」と。檀紙については、「中古ノ世ニハ奥州ヨリ夥シク檀紙ヲ出セリ 檀紙ヲ陸奥紙ト云フニテ知ルベシ 然ルニ近来ニ至テハ絶テ奥州ヨリ檀紙ノ出ルヲ聞ズ」として、檀紙抄造の衰退を指摘している(今日ではにしきざ科の檀 *Eyonampus sieholdianus* は将棋駒やこけしの材料として重用され、いわゆる檀紙の原料はコウゾである)。江戸中期より利用され始めたミツマタについては、「今駿河甲斐等ヨリ出ル紙ハ此ノ三又木ノ皮ニテ漉タル者ナリ、……只此ノ三又木ノ皮ハ性ノ弱キ者ナルヲ以テ其ノ紙ノ下品ナルヲ奈トモスルヲ無シ宜ク鯨尾カ縹垣ノ楮皮ヲ混和シテ漉ベシ」と記している。このほかにも製紙原料に適した樹木があるとして、「又桑ノ皮、桜木ノ皮、其ノ他雜松、雜桑、木芙蓉ノ類モ楮ヲ作ル法ヲ用テ畠ニ多ク植ニ立テ楮ノ皮ヲ剥採テ楮ノ如クニスレバ皆以テ紙ヲ漉ベシ」と強調している(財部文庫・明治7年版を参照)。江戸時代中期を過ぎると、製紙原料として利用される樹木の種類もきわめて豊富になったことが窺われる。したがって、ベックマンによる同時代(日本の天明・寛政期)の和紙に関する知識は、きわめて限られたものであったと言わざるをえない。

なお、前述のように今日の手抄き和紙(機械抄き和紙は統計上洋紙に含められる)の主要原料は、例外をのぞくと(たとえば福井県産の揮毫紙用の麻紙は麻を原料とする)コウゾ、ミツマタ、ガンビの3種であるが、前者はくわ科に、後二者はじんちょうげ科に属する。後述の理由により、ここでこれらの学名を牧野、前掲書で確認しておく以下の通りである。

コウゾ 属コウゾ *Broussonetia Kazinoki* Sieb.

ツルコウゾ(ムキミカズラ) *Broussonetia Kaempferi* Sieb.

カジノキ *Broussonetia papyrifera* Vent.

ミツマタ属ミツマタ *Edgeworthia chrysantha* Lindl. (= *E. papyrifera* Sieb. et Zucc.)

ガンビ 属ガンビ *Wikstroemia sikokiana* Franch. et Sav. (= *Diplomorpha sikokiana* Nakai)

コガンビ(イスガンビ) *Wikstroemia gampi* Maxim. (= *Diplomorpha gampi* Nakai)

キガンビ *Wikstroemia trichotoma* Makino

このうちコガンビだけが樹皮の繊維が弱く製紙原料に適さない。上記種小名から、コウゾ、ミツマタそれにマニミまでも、ケンペルヤジーボルトによってヨーロッパに紹介されたことが窺われる。

ヒンドスタンでは綱、網、包装用紐<sup>8)</sup>、そしてまた紙は *Crotalaria juncea* からつくる<sup>9)</sup>。かの地でこの作物はわたくしたちの大麻のように栽培されている。それゆえ、ロンドンの「東インド」会社は中国大麻 *Chinesischer Hanf* と呼んで栽培を薦めるのである」(S. 60-61)。

「綿を栽培したアラビア人が、これから紙をも製した。そして、この植物の栽培と利用方法をシチリア、マルタ、スペインに伝えたのである。亜麻を栽培するヨーロッパ人は、亜麻から紙をもつくることをおそらく長くは躊躇しなかったであろう。多分当初は、ブライトコブ *Breitkopf* が見たと信じているように、亜麻と綿のぼろ *Hader* を混ぜ合わせていたのであろう。ヨーロッパ人が何世紀も亜麻紙のみに馴れ親んだ後、すべての紙は、あるいは最高級紙は、もっぱら亜麻ぼろからつくられるかのごとき見方がヨーロッパに広まった。というも、ヨーロッパにはこれより安い原料はなく、しなるペンにとって<sup>10)</sup>これほど書きやすい紙もないからである」(S. 61)。

ベックマンによれば、製紙技術は綿栽培技術とともに、西アジアを經由して南ヨーロッパに伝来したことになる。そこでヨーロッパ人はまず綿紙を知り、しかる後にヨーロッパで自給できる亜麻による製紙を覚え、18世紀後半になると再び綿が併用されるようになる、という経過を辿ったという。羊毛と並んでドイツの伝統的衣料材料である亜麻を、製紙材料という面で綿と比較している

8) *Packleinen* が『技術論入門』では包装用布 *Packtuch* になっている。Beckmann, *Technologie*, S. 174.

9) いわゆるサンヘンプ *Sun(n)hemp*, *San (n) hemp* を指す。岩佐は、英名はヒンズー名 *San* から来ており、漢名の太陽麻、赫麻もわが国において英名から直訳したものであろうと推定している。同じくインドで製紙原料になるものとして同属の *Crotalaria leschenaultii* DC. も挙げられている。岩佐、前掲書、440-442ページ。なお、ルドビーグは *Bast* の項目で、インド、とりわけ *Angola* 州では、住民がすべての織物、衣服、絨毯等を樹皮繊維で製織し、これは絹織物のような外観を呈すると述べている。Ludovici, *a. a. O.*, *Theil 1*, Sp. 1353-1355.

10) ベックマンは『論集』の中で「筆記用ペン」を一項目として掲げ、筆ペンと羽根ペンについて論じている。かれによれば羽根ペンは筆ペンより弾性が強く優れていた。Beckmann, *History of Inventions*, Vol. 1, pp. 405-413 [邦訳、II, 546-555ページ]。鞣皮繊維を原料とする和紙や唐紙と亜麻・綿織物のぼろを再生したヨーロッパ紙との差異は、当然に筆(毛筆とペン)と顔料(墨とインク)の差異とも関連していよう。

点にも、ベックマンの綿関心の独自性が現れていると言えよう<sup>11)</sup>。

ところで、1844年にケラー Friedrich Gottlob Keller (1816-1895) が木材パルプ利用技術開発に先鞭をつけ、19世紀半以降主要な製紙原料は麻・綿ぼろから木材パルプに大きく転換していった。しかし、それまできわめて長期にわたってヨーロッパ製紙業が原料をぼろに頼ったことは、「ぼろ回収業」を社会的分業の一環として自立せしめたばかりでなく、ぼろの国際的流通機構をも成立させるにいたったのは周知のことである。ぼろは本源的蓄積期の重要な国際商品となったのである<sup>12)</sup>。これに対して、麻ばかりか綿まで豊富に産出した日

- 11) ここでルドビーチの「紙」項目の紹介をしておこう。そこでは、①原料、②製法、③種類、について記述されているが、わたくしたちにとってとりわけ関心と呼ぶのは①であり、しかもベックマンの記述と喰い違いをみせていることは看過しえない。ルドビーチでは製紙原料として(i)葦、(ii)綿、(iii)絹、(iv)樹皮、(v)靱皮、(vi)石綿、(vii) (大・亜)麻ぼろ、の7種が挙げられている。第二の綿については、「いつ綿紙が登場したのかをわたくしたちは同じく正確には知らない。おそらく9あるいは10世紀にこれをつくり始めたのであろう。今日なおベルジヤ人と中国人は紙を綿あるいは綿布ぼろからつくっている。この紙は、とりわけ中国の紙は、その品質においてフランス紙に匹敵する。ヨーロッパでは綿紙の使用はつとに止んでしまった。それ以来現行の〔麻〕紙をつくり始めたのである」と記述されている。第三の絹については次のように言う。「絹と絹布ぼろは製紙原料となりうるものであり、実際に中国人によってつくられている。しかし、この絹紙はきわめて薄いので、その大部分は片面だけにしか書きつけることができない」と。第四については以下のように。「東インド、日本、中国ではこれ〔絹布、絹布ぼろ〕に次いである樹の柔い内皮からも紙をつくるが、二、三の樹は *Bambau* と呼ばれ、他は *Raadsi* あるいは *Ranschy* と呼ばれる。その製紙法はわたくしたちの場合とほとんど同じである。この紙は絹〔紙〕や綿〔紙〕のように薄く、しなやかで、柔く、またきわめてつややかでもあるので、まるで銀粉をまぶしたかワニス塗ったように見える。これらの紙の中で和紙がもっともしっかりしているとみなされている。それゆえ、これはまさしく巻紙の形で販売され、長さや幅の注文に応じて切り揃えられ、さらに優美な絵で仕立てられるのである」。ちなみに、第五についても引用しておけば、「同じようにしてマダガスカル島の住民は *Abobaum* の靱皮から紙をつくる。しかし、この紙は白くはなく黄色である」。Ludovici, *a. a. O.*, Theil 4, Sp. 458-460. 『天工開物』に綿・絹ぼろの言及はなく、また注8) でみたように、少くとも江戸時代に絹布ぼろが和紙原料として利用されたことを示す資料を筆者はまだ知らない。その上、この *Bambau*, *Raadsi*, *Ranschy* が何を指すのかもさだかでない。和紙、唐紙に関するかぎり、ルドビーチの記述はベックマンのそれにもまして不正確である。
- 12) とりわけ出版業の興隆にともない紙需要の激増した17世紀以降、ぼろは重商主義的貿易政策の規制対象商品の一つとなった。Ludovici, *a. a. O.*, Theil 3, Sp. 1460. オランダはドイツやペーメン等がぼろ輸出を禁止した後、死者に亜麻布を着せることを禁止し、年間少くとも20万 lb のぼろを節約したという。Beckmann, *Technologie*, S. 153-155. なお、ルドビーチは前掲の *Lumpen, oder Hadern* の項目で、亜麻・大麻布のぼろ切ればかりでなく、毛織物や他の織物のぼろも製紙原料として用いられたことを指摘している。



本では和紙原料としてぼろを利用することはなかったようである<sup>13)</sup>。むしろ、紙子、紙衣、紙布、太布、科布(信濃布)のように紙そのものを直接衣料原料にしたり、樹皮の繊維を用いて布を織ることはあったが<sup>14)</sup>、その逆ではなかった。一般に製紙業と織物業は広義の繊維産業に含められるが、日本とドイツ

13) 日本では一般に古着は引き裂いて再織し、再生衣料として用いる習慣が続いたようである。

「庶民の裂織り〔ぼろ織り〕とは木綿をぼろになるまで着用し、これを織り込むという、綿布の完璧な更生法であった」。福井貞子『木綿口伝』、法政大学出版局、1984年、168-169ページ。柳田国男は「何を着て居たか」(『斯民家庭』、明治44年、『木綿以前の事』、創元社、昭和14年、所収、後者は『定本・柳田国男集』、第14巻、筑摩書房、昭和37年、に収録)と題する小論の中で次のように述べている。「先頃熊本県の九州製紙会社を見に行つたときに、私は紙の原料の供給地を尋ね試みたことがある。藁だけは勿論この附近の農村一帯から集めて来るが、古藍紙の多量は大坂を經由し、殊に古麻布を主として東北の寒い地方から、仰いで居るといふのが意外であつた。『柳田国男集』、前掲巻、16ページ。また、明治42年に執筆された「美濃紙現状」(『柳田国男集』、第29巻、所収)のなかでも、「洋紙ノ製造ハ近米稍盛ニシテ其価額ニ於テ和紙ノ四分ノ一ヲ占ム其原料トシテハ故麻綿布ノ消費ハ未ダ盛ナラズ「ポルプ」ノ消費ハ頗大ナルモ其国産ヲ用ケルモノハ……」と述べている。これらの記述から推定すると、日本で麻・綿布ぼろを製紙原料とするようになったのは、洋紙製造技術の導入以降のようである。

14) 紙子または紙衣は紙に加工して衣料に仕立てたものであり、紙布は紙を細く切つてつった継糸で織った布で、こゝれた原料は繊維でなく紙そのものである。なお、紙布の製法が1860年代に日本からアメリカに伝播し、80年代にはドイツにも伝わって技術的改良が加えられ、19世紀末から第一次大戦期にかけて「紙糸」Papiergarn が袋、敷物、紐等の原料としてドイツで盛んに利用されたことについては、Arthur Weiß, *Vorlesungen über technische und wirtschaftliche Grundlagen der Textil-Industrie*, Leipzig u. Wien, 1923, S. 87-92, を参照。また徳島県木頭村に伝わる「太布」製織技術が、最近、朝日新聞(大阪版夕刊、昭和60年2月4日)で紹介されたが、このタフについて、柳田は前掲「何を着て居たか」の中で次のように述べている。「タフは太布と書く人もあるが、実は今日まだ正確に宛つべき漢字が知られて居ない。だが自分だけは悉く袴ハカマの袴であらうと思つて居る。タフは昔の言葉では麻でない別の衣料であつた」(17ページ)。「近年まで木曾の福島に問屋があつて、盛んに関西地方に送り出して居たタフなるものも、たとえ今日では所謂木曾の麻衣だけに限られて居るとしても、少なくとも名の起りは皆て其以外の植物繊維を織つたものがあつた為で……」(19ページ)。「阿波の三好美海部等の諸郡では、山村到る処にタフを生産する。是は穀の木皮又は葛や藤の皮を織つた鹿布であると、阿波志といふ書には記して居る」(20ページ)。「阿波志にタフの原料として穀の皮を用ゐるといふカヂも、今のヒメカウゾか、そうで無くとも此属の一種であつたらうと思ふ」(21ページ)。「〔下総の〕結城のユフは一種麻以外の繊維料で、それは穀のことだといふことが古く認められて居たのである。袴はカヂとも謂ふ地方があつて、現在は紙の原料としてのみ知られて居るが、以前は少なくとも其一種に、是を糸に紡いで布に織り用ゐたものがあつたのである。……ユフと訓まれた昔の木綿が今のモメンの木綿と同様に、衣服の資料であつたこともほゞ明らかなのである」(22ページ)。まことに、木綿〔穀〕は木綿〔ワタ〕以前の重要な織物原料の一つであつたばかりか、まずこのようなものとして日本人に利用され始めたのであり、しかも樹皮繊維の穀は草皮繊維の苧麻、大麻とともに日本でもっとも古い織物原料であつた。遠藤元男『織物の日本史』NHK ブックス148、日本放送出版協会、昭和46年、20-21ページ。武部善人『日本木綿史の研究』、吉川弘文館、昭和60年、11-25ページ。

では両者の歴史的産業連関は異っていたと言えそうである。

⑥ ヨーロッパ綿織物業

ここで叙述は綿織物業に戻り、ヨーロッパ綿織物業の現状が以下のように総括される。

「ヨーロッパの綿布消費量は大会社設立後に増大した。この商品のために多額の貨幣の流出が嘆かれるようになると、原料を輸入し国内で加工することによって、この損失を少くともある程度まで減じようとした。そこですでに綿布捺染業が成立したばかりでなく、綿織物業も成立し、現在も多数の人間に収入を与えている」(S. 61-62)。

この記述はヨーロッパ一般を論じる体裁をとってはいるが、実際にはイギリス綿工業の発展を念頭に置いたものである。というのは、これに続いてイギリス綿工業の現状が説明されているからである。1788年の議会報告に拠って、綿製品生産額が1781年の200万 £ から87年の750万 £ に4倍近い急伸びを示したことを指摘した後、ベックマンは次のように述べる。

「全イギリスの綿工場で1785年：1799,2888 lb, 86年：1615,1867 lb, 87年：2260万 lb [の綿花]を消費した。この綿花使用量の半分は西インド産であるということだ」(S. 62-63)。

まず染色工程から始まり、ついで織布・紡績工程に遡及する方向で進んだイギリス綿工業の輸入代替過程の紹介が、どの程度に正確なものであるかを、イギリス綿工業史に関する今日の研究水準に照らして検討することは、本稿では控えたい。むしろ筆者の関心をそそるのは、1793年初に刊行された「綿」論文が、1788年に公表されたイギリス議会資料を利用しているという点である。当時の情報伝達速度を考えれば、4年という情報入手の時間差はけっして大きいとは言えまい。おそらくベックマンは、産業革命期イギリス綿工業の発展をもっとも良く観察していたドイツ人の一人であっただろう。その際無視しえないことは、ベックマンの叙述の中に、イギリスとドイツとの技術較差に対する関心を窺わせる文章が見当たらないということである。かれの主要関心が、ヨー

ロッパと非ヨーロッパとの間になお残る技術較差に向けられていたことはまず疑いを入れない。このことは産業革命期のイギリスがドイツの同時代人の眼にどのようなものとして映っていたか、ということを考える上で示唆的である。ハノーファー人ベックマンが、同君連合のイギリスをどの程度に「外国」とみなしていたかという点に問題が残るにしてもである。

次いでドイツの現状に関する以下のような叙述が見出される。

「ブランデンブルク諸国ではこの外国産原料の加工は国内の羊毛[生産]に損害を与えてしまった。かつては薄地の、軽い国内産毛織物を身にまとった女たちは綿布になじんでしまった。同様のことが綿織企業 Kattunwebereyen がまだ設立されていない他の [ドイツ] 諸国においても間もなく流行となり、この生地 Kleidungsstücke の着心地はまことにすばらしいので、当局によって執られた厳しい輸入禁止措置は、そこでもこの生地をついに排除することができなかった」(S. 63)。

ベックマンによれば、綿織物は少くともドイツにおいては<sup>15)</sup>まづ奢侈品の性格の強い女性用衣料として登場し、そのため直接打撃を受けたのは薄地毛織物であった。しかも、この婦人服需要における嗜好の変化は一時的、局地的なものに留まることなく、長期的かつ全ヨーロッパ的の拡がりを見せたようである<sup>15)</sup>。繊維工業における基本的原料の転換をひき起した直接の原因が、婦人服における流行の変化という需要面の変動であったということは、資本制産業構造の確

15) 18世紀の服飾の変化を追うことはそれほど困難ではないが、主要材料の使用比率を把握することは容易でない。ただし、1780年代に綿布が愛用されたことは、次のような指摘から窺うことができる。「見渡したところ、衣装の素材として、モスリンが突によく使われているのがわかる。1780年代にはモスリンは、特にベティコート用として最も人気の高い生地だった」。J. アンダーソン・ブラック/マッジ・ガーラント著、山内紗織訳『ファッションの歴史(下)』、PARCO 出版局、1978年、68ページ。綿工業生産力の急激な上昇を反映するイギリスでの服飾の変化は、1780年代の「英国心酔」によってフランスに影響を及ぼし(ミシェル・ポーリュウ著・中村祐三訳『服飾の歴史—近世・近代編—』文庫クセジュ、白水社、1976年、104ページ以降を参照。ただし、ルイ16世期を扱ったこの節では生地についての言及はほとんど無い)、それが大陸各地に新しい流行を生み出していったことは十分に推定できるところである。フェルナン・ブローデル著・村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 I-1 日常性の構造 I』、みすず書房、1985年、436-437ページ。なお、ゲティンゲンの属するハノーファー選帝侯国はイギリスと同君連合の関係にあったから、イギリスにおける服飾の流行が他のドイツ諸国に先がけて、ハノーブ

立過程で「奢侈品」ないし「流行品」がはたした役割にあらためて眼を向けざるものである。しかも興味深いことには、ベックマンもまた奢侈的需要に否定的な評価を下そうとはしないばかりか、これを *Industrie* と結びつけて理解しようとしてさえしているのである。すでに前稿で引用したように、このドイツの消費構造の変化の描写の後に *Industrie* 概念が再論されるのであるが、この文脈の中で *Fleiß* と *Industrie* があらたに、「最小必要限度の欲求を超えるものを得ようとする自由」と結びつけられて論じられていることに注目したい。

ベックマンによれば、*Fleiß* と *Industrie* によってのみ「外国物産」の輸入代替は可能になるのだが、他面、この *Fleiß* と *Industrie* の根源は「外国物産」に対する、すなわち生存に不可欠というわけではないが、生活の快適さをより高めてくれるような「奢侈品」、「贅沢品」に対する欲望にほかならないのである。明示的に *Luxus* という用語が使われているわけではないものの、かれの *Industrie* 概念はこの点においても、ヒュームやステュアートの系列につらなりうるものと言えよう<sup>16)</sup>。

▼ファーに直接にもたらされることは十分にありえたであろう。

- 16) とりわけ、小林昇『経済学の形成時代』、未来社、1961年、第1-2章；同『著作集V』F；同「サー・ジェイムズ・ステュアートと経済学における歴史主義」『三田学会雑誌』第75巻特別号、1983年；同「ステュアート『原理』における「インダストリ」について」『東京経大会誌』第137号、1984年；田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』、未来社、1971年、第2章；坂本達哉「D. ヒュームの人間労働概念とインダストリー論」早坂忠編『古典派経済学研究(1)』、雄松堂出版、1984年、を参照。小林によれば、ステュアートは1757年から4年間テュービンゲンに滞在し、この町で『原理』第3編までを書き上げた。『原理』はドイツ・カメラリズムの風土に客として基礎の成った書物だという。かれは1761年にオランダに向い、63年頃イギリスに帰国した。小林『著作集V』、26-28ページ。他方、ベックマンは1759年にゲティンゲン大学に入学し、1763年St. ベテルスブルクのギムナジウム教師として赴任するまで、ブラウンシュバイク、オランダに小旅行を試みている。Grundke, Nachwort, S. 5-6. 二人の足跡がドイツないしオランダで交錯した蓋然性は極小とすべきであろうが、とまれ同時代人ベックマンがヘーゲルヤリストとは別の形で、ステュアートから影響を受けていたことはありうることではないだろうか。注25)を参照。ちなみに、資本制生産様式の確立後に *Luxus* と *Industrie* との歴史的関連をあらためて強調しようとしたのは、かのゾンバルトであった。Werner Sombart, *Luxus und Kapitalismus*, München・Leipzig 1913 [田中九一訳『奢侈と資本主義』、東京而立社、1925年]。「奢侈的消費の革命的力」と題したその最終章において、かれは「奢侈品工業」Luxusindustrien が資本主義に適合的である理由を、1. 生産過程の性質（高価な原料、高度な技術）、2. 需要の性質（流行 Mode への依存）、3. 外国人の貢献（同職組合的羈絆からの解放）、4. 高収益性（大量販売による高売上げはやっと後代に始まる）、の四点に要約している。「奢侈品工業」が合理的な生産組織・技術の発展を促しうるのと同じ程度において、苛酷な長時間・低賃銀労働の強制にも

ここで、そのようなものとしての綿織物の一覧表を掲げておこう。ベックマンはすでに叙述の初めの部分で、ヨーロッパに輸入される綿布の分類を試みている。かれによれば、

「このインド綿布 [Kattune] の多様性たるや大変なもので、またきわめて変わりやすく、相違はあまりに不明確で綿布の分類表を作成することも難しいほどである。時が変わると [競売の際の] 「価格表」 Preisverzeichnis から [古い] 名称が消え、新しい名称が品目の新旧を問わず現われる。どの民族も外国語の名称を [現地語とは] 異なる仕方で発音し、その発音にしたがって書き綴る。このことによって一見したところ品目数が増大するのである」 (S. 14-15)。

そこでベックマンは「辞書での参照を容易にするために」、東インド会社の「価格表」にもっとも頻繁に現われる呼称の整理を試みるのであるが、それはルドビッチの『辞典』の項目と較べるとかなり粗いと言わざるをえない。それゆえ、ベックマンの分類を補完するためにルドビッチの項目をこれに対照させた上で、一覧表にまともてみることにする(第1表)<sup>17)</sup>。もとよりこれはまだ不完全なものにすぎない。したがって他の資料によって補正を重ねる必要がある

走りうる可能性を無視していることはさておくにしても、18世紀人にとっては一つの魂の中に相互媒介的契機として結合していたはずの *Luxus* と *Industrie* とは、いまやゾンバルトによって二つの魂に分属せしめられ、需要(王侯貴族)と供給(企業家)の關係として扱えられるにいたっている。ほぼ時を同じくして刊行された Joseph A. Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig 1912 [塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『シュムペーター・経済発展の理論』, 改訂版, 岩波書店, 1980年]、の「新結合」*Neue Kombinationen* 概念に疑いもなく親和性を示すゾンバルトの「奢侈」概念が、企業家の「有能さ」、「知識」、「合理性」等と対応するとされるかぎり、かれの観点はベックマンのそれと一面においてつながっていることもまた否定できない。もっとも、ゾンバルトの「すべての奢侈品工業は中世ヨーロッパにおいて人為的に創り出されたものである」(a. a. O., S. 205) という叙述に接する時、18世紀人ベックマンの視野の中には確実に扱えられていたはずの、*Industrie* 生成の一契機としての非ヨーロッパ物産の影が、19世紀のうちにドイツ人の記憶から完全に消え失せてしまったらしいことを、わたくしたちは痛感せざるをえないのではあるが。

- 17) 『技術学入門』における「手工業の自然的分類」によれば、第21部門に、122. *Kattunweberey*, 123. *Zitse*, *Parchent*, *Kanefas*, 124. *Nesseltuchweberey* の3業種が挙げられており、これがベックマンの綿布に関する大分類とみることができよう。Beckmann, *Technologie*, S. 33. ルドビッチについては、*Cattun* の項目 (a. a. O., Theil 2, Sp. 227-234) で挙げられている品目について、それぞれの項目を検索するというやり方をとった。

第 1 表

	品 目	Beckmann	Ludovici
1	Abrohani		Netteluch の一種。白地、目のつまった薄地綿布。東インド、とくにベンガル製。16× $\frac{5}{8}$ ~ $\frac{3}{4}$ E. Mallemolle と Netteluch を参照。(Theil 1, Sp. 96)
2	Baffetas	Baftas. やや厚地の綿布	かなり厚地の綿布。純白。東インド製。最高級布はスーラト地域製。13 $\frac{3}{4}$ ~14× $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{7}{8}$ E. 細幅物は Orgagis, Nossaris, Gaudiris, Nerindes, Dabouis と呼ばれる。Baffetas Narrow-whit: 13 $\frac{1}{2}$ × $\frac{1}{2}$ E., B. Broad-whit; 14× $\frac{3}{4}$ E., B. Narrow-brown; 14× $\frac{1}{2}$ E., B. Broad-brown; 14× $\frac{3}{4}$ E. (Theil 1, Sp. 1157)
3	Basins	Bazins. 綾織り綿布。これには Bombasin, Bombazin も含まれる。この語から Bommessin, さらには Baumseide, Baumbast, Bast という語も発生した。イタリア語で綿は bambece, bombace, bombagio といひ、Nesseltuch は bambagino といひ。植物学者のいふ Bombax もこれと同系統である。	平織り純綿布。多様な品質、組織、幅、密度、風合いを持ち、大麻・亜麻・麻屑糸をも使用したものもあるが、これはフランスでは禁止されている。フランスではとりわけトロワ、ルーアン、リヨンで製織され、厳しい品質規制を受ける。22~24× $\frac{1}{2}$ (+1")E. オランダ製は一般に縮織り、12× $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{5}{8}$ E. ブリュヘ製は Bombasine と呼ばれる。無地物4種、縮織り2種。東インド製は白地、けばが無く、平織り、綾織り、紋織りがある。ベンガル、ボンディシェリー、ペラザール Bellasar で製織。7・9・10× $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{5}{8}$ E. 7 $\frac{1}{2}$ ・9 $\frac{1}{2}$ × $\frac{3}{4}$ ・ $\frac{5}{8}$ E. 胴着、上衣、Leibgen [?], Wärmser [?], 寝台幕、カーテン、チョッキ用生地。東インド製はカーテン地に最適。(Theil 1, Sp. 1342-1347)
4	Berams		厚地の純綿布。東インド、とりわけスーラト製。白地: 9× $\frac{7}{8}$ E., 多色縮織り: 11 $\frac{1}{2}$ × $\frac{3}{4}$ E. (Theil 1, Sp. 1542)
5	Bétille	Bethillis. Mousselines に属する。	Bethilles. Nesseltücher あるいは白地綿布。東インドとりわけボンディシェリーで製織。① Bétille: やや厚地。16~20× $\frac{5}{8}$ E.,

	品目	Beckmann	Ludovici
6	Bombasin		② <i>Betille Organdy</i> : 丸みをおびたしぼを持ち、極薄。12½ × ¾ × ⅝ E, ③ <i>Betille Tarnatane</i> : 日がきわめてつむ。12½ ~ 13 × ⅞ E, <i>Netteluch</i> を参照。(Theil 1, Sp. 1638-1639)
7	Caladaris	多色・縞織り綿布。	平織り綿布。 <i>Basin</i> を参照。(Theil 1, Sp. 1940) 赤あるいは黒の縞織り綿布。東インド製、とりわけベンガル製。8 × ⅞ E. (Theil 2, Sp. 55)
8	Cambayes		綿布。ベンガル、マドラス、コロマンデル海岸で製織。イギリス人によりマドラスからマニラに仕向けられる。オランダ東インド会社によってオランダに輸入。(Theil 2, Sp. 85)
9	Chacart		蜂巢織り綿布の一種。多種の色地。東インド、とりわけスーラトで製織。11½ × ¾ E. (Theil 2, Sp. 269)
10	Chavonis		<i>Mousseline</i> の一種。 <i>Tarnatane</i> の一種でもある。ベンガル製。 <i>Tarnatane</i> を参照。(Theil 3, Sp. 295-296)
11	Chelles	Chellas, Chilas, Chillas. 蜂巢織り。	蜂巢織り綿布。東インド、とりわけスーラトで製織。種類多く蜂巢織り風に手描きのものもある。13・14 × ¾ E. インドでは女奴隷のスカート用。オランダではズボン下用。 <i>Katteguis</i> あるいは <i>würflichte Pagnes</i> と呼ばれる <i>Chelles</i> の一種もある。 <i>Katteguis</i> を参照。(Theil 2, Sp. 304)
12	Chites	Chits, Zitz, Sitz. 多色。たいていは濃色。イギリス人は <i>Callicoes</i> , フランス人は不正確にも <i>Perses</i> と呼ぶ。	<i>Zits, Zitze, Chites</i> (fr.). 何らかのやり方で柄あるいは色による模様をつけたあらゆるインド製綿布は東インドでこのように呼ばれる。コロマンデル海岸のいたる所で、またスーラトで、ムガル帝国で製織される。最上質布はマスリバトナム製。アムダバド、セロンゼ <i>Seronse</i> , トットゥコーリン <i>Tutucorin</i> , マドゥーラ海岸製も好まれる。チアボントリア <i>Chiabontria</i> ,

		<p>メツィーリア Metsilia, パテナ Patena 製はオランダ, ドイツで需要が大きい。ラホール製はもっとも厚地で価格も低い。ブランポール Brampor 製は目のつまった綿布でハンカチ (嗅ぎタバコ喫煙用) 生地となる。Zitze は総じて3種に区分される。①手描き綿布で Calmandar と呼ばれる, ②捺染されたものでこれはすべてムガル帝国で製造される, ③浸染されたもので Porcellaines (青地, 青地に白模様, 白地に青模様) と呼ばれる。6<math>\frac{3}{8}</math>~10<math>\times\frac{3}{8}</math>~<math>\frac{3}{8}</math>E. スイスでは Perses, Persiennes と呼ばれる。オランダ人の取扱量多く, 東アジア内交易 (対日輸出も含む)もかれらの手で行われる。イギリス人はマニラ, 中国に仕向ける。フランスではインド綿布として [輸入] 禁止。Zitze は色彩の鮮明さ, 堅牢性をもってなる。(Theil 5, Sp. 1103-1105)</p>
13	Coupis	<p>蜂巢織り綿布。東インドとりわけベンガル製。8<math>\times\frac{3}{8}</math>~<math>\frac{3}{8}</math>E. (Theil 2, Sp. 691)</p>
14	Couteline	<p>厚地, 青色あるいは白地の純綿布。東インド, とりわけスーラト製。14<math>\times\frac{3}{8}</math>~<math>\frac{3}{8}</math>E. (Theil 2, Sp. 709)</p>
15	Doulefsais	<p>Nettelruch の一種。白地, 日が強度につまった極薄綿布。東インド, とりわけベンガル製。16<math>\frac{1}{2}</math><math>\times\frac{3}{8}</math>E. Mallemolles を参照。(Theil 2, Sp. 1016)</p>
16	Doutis	<p>Datis. 白地でやや厚地の綿布。東インド, とりわけスーラト製。しばしば Sauvaguzes や Sauvagagis と混同される。かつてフランスでは捺染用生地として使用。14<math>\times\frac{3}{8}</math>~1<math>\frac{1}{8}</math>E. さらに, Doutis Dungaris whit は白地で 13<math>\frac{3}{8}</math><math>\times\frac{3}{8}</math>E., Ungares broun od. Bruns は 14<math>\times\frac{3}{8}</math>E., Doutis Gour gouches は白地で 13<math>\times\frac{3}{8}</math>E. (Theil 2, Sp. 1017-1018)</p>



	品 目	Beckmann	Ludovici
17	Gingans	Guingans, Guingands 6	時には樹皮繊維を綿糸と交織する。青色、白地、無地、縞織り。とりわけ蜂巢織りは Cherchanes と呼ばれる。さらに、Guingans-Tafachelas, Guingans Pinasse と呼ばれるものもある。7½×¾~¾E. 東インド、とりわけベンガル、コロマンデル海岸製。絹と樹皮繊維との交織の Guingans もある。(Theil 2, Sp. 2335-2336)
18	Gueras	Garas, Garats, Gerras, Gerraes, ベンガル製	Garas (eng.); Gerras, Gerraes (nied.). 白地綿布。ベンガル製。11¾~13¾×¾E. マドラス製の手描きのもはイギリス人によってマニラ諸島に仕向けられる。インドでは卓布、家具用。またほうたいとしてヨーロッパの〔亜麻製〕ほうたいより優れる。(Theil 2, Sp. 2310-2311)
19	Guineatuf-Longée		絹綿交織布。東インド製。6・8・13×¾・¾E. (Theil 2, Sp. 2333)
20	Guinee		白地、やや薄地の綿布。東インド、とりわけコロマンデル海岸製。23・29½~30×¾E. 長さ28E. のものはベンガル、マドゥーラ海岸で製織し、薄・濃青に染色。イギリス人が包括的に Guineas Stufs と呼ぶものは東インド製の縞織り、白地、青色綿布を指し、4½×¾E. ヨーロッパの対アフリカ貿易、とりわけギネアとの交易に重要なところからこの品名が由来する。Tapsel とほとんど変わらないが、これの方がやや長く、かつ幅も広い。(Theil 2, Sp. 2334-2335)
21	Hamans		白地、極薄のきわめて目のつまった綿布。東インド製。最上質布はベンガル製。9½×1¾E. (Theil 3, Sp. 62)
22	Indienne		①東インド製綿布を生地にした夜間着、②夜間着用綿布、③半

23	Kattequi		絹羊毛〔綿?〕織物。アミアンの堅機織工によって製織される。(Theil 3, Sp. 551) Kattegui, Cattequi, Catequi, 青色綿布の一種。東インド、とりわけスーラト製。25× $\frac{3}{8}$ E. Chelles を参照。(Theil 3, Sp. 800)
24	Korathes	“	Toques de Cambaye. 強い厚地の綿布。東インド、とりわけスーラト製。3 $\frac{3}{8}$ × $\frac{3}{8}$ E. 厚地の襟巻用。(Theil 3, Sp. 909)
25	Lampas	Lampasses, 手描き織物	手描き, 平織り綿布の一種。東インド、とりわけコロマンデル海岸製。18×2C. (Theil 3, Sp. 1082)
26	Maltemolles	Malmolens	Nesseltuch. あるいは白地, 目のつんだ極薄綿布の一種。ベンガル製。16× $\frac{1}{8}$ ・ $\frac{3}{8}$ ・ $\frac{7}{8}$ ・ $\frac{1}{2}$ E. 種類が多いが, オランダ東インド会社は3種に区分。① Loosc, ② Cavalungen, ③ Tarnatane. Hamedis, Doulebsais, Abrobanis も Mallemolle と呼ばれる。(Theil 3, 1561-1563)
27	Mamedis		Nesseltuch の一種。白地, 目のつまった薄地綿布。東インド、とりわけベンガル製。16× $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{5}{8}$ E. Mallemolle と Netteltuch を参照。(Theil 3, Sp. 109-110)
28	Mauris	Mouris, Mourys	Mouris (nied.). 平織り綿布。コロマンデル海岸製。種類が多い(薄・厚地, 広・細幅, 白地, 赤色)。12×1 $\frac{1}{4}$ ・1 $\frac{3}{8}$ ・1 $\frac{1}{2}$ E.(h) Percales- od. Percalles-Mauris もこれに含まれる。これは白地の薄目の綿布で, 東インド、とりわけボンディンシェリー製。7 $\frac{1}{4}$ ~7 $\frac{3}{8}$ ×1 $\frac{1}{2}$ E.(h) Percales (赤色綿布, 10 $\frac{3}{8}$ ×1 $\frac{1}{2}$ E.) と混同してはならない。(Theil 3, Sp. 1731-1732)
29	Mousseline	少し粗く, 少し撚りをかけた糸によって製織された布。まさにそのためにやや毛に似た風合いを持ち, これが柔か	Netteltuch, Nesseltuch, Nesteltuch. 薄い白地純綿布。無地, 綿織り, 花模様の刺繍。表面は完全に平面なのではなく, 小さな粗い繊維素があり, 苔に似る。多種多様であるがすべて東イ

	品 目	Beckmann	Ludovici
		な苔類 Moose (mousse) に被われているように見えるところからこの名称が由来する。ドイツ語の呼称は Nes-seltuch. これは誤解ないしかつての商人たちによる詐称に由来する。というものは、蕁麻 Nessel のいくつかの種類は実際に、カスピ海沿岸部、ベルンヤ、ボハラで紐、然糸、厚地織物だけにではあるが加工されるからである。	インドからの輸入に類する。フランスの積荷目録によれば, Einfache Betilles, Betilles Organdy, Betilles Tarnatanes, Tarnatanes Chavonis, Adatais, Mamehaty, Abrohany, Doulebsais, Hamedis (Mamehaty 以下4種は Mallemolles ともいう), einfache Mallemolles, Mallemolles Tarnatanes, Casses, Chabnam od. Rosees, Doreas, Momotbanys, Tansjehs, Terindanes, Toques, 刺繍したあるいは縞織りの襟巻。イギリスの積荷目録によれば, Cogmorria, Tans, Bans, Cassas, Muls, Moß, Seercossas, Domcossas, Bordscossas, Torpscossas, Tangs. このほか単に A, B, C と表示されるものもある。婦人用の各種装身具(襟巻, 前掛, 襟飾り, 胸飾りリボン, 袖等)用の生地。(Theil 4, Sp. 108-111)
30	Percalles	Percalles	Mauris を参照。
31	Salampouris	Salempouris, Salams-pourys	平織り綿布の一種。コロマンデル海岸製。白地: $72 \times 2\frac{1}{4}$ C. 青色: $32 \times 2\frac{1}{4}$ C. イギリス人によってマドラスからマニラへ仕向けられる。フランス人はボンディンシェリーで買付け。(Theil 4, Sp. 1341)
32	Sanas		白地あるいは青色綿布。東インド, とりわけベンガル製。白地: $9\frac{1}{2} \times \frac{3}{4} \sim \frac{5}{8}$ E. 青色: $11\frac{1}{4} \sim 12 \times \frac{3}{8}$ E. (Theil 4, Sp. 1394)
33	Sauvagagi		白地綿布の一種。東インド, とりわけスーラト製。 $13 \sim 13\frac{1}{2} \times \frac{3}{8}$ E. (Theil 4, Sp. 1434)
34	Sauvaguzees		Souaguzes. 東インド製綿布。① Balazees スーラト製。白地綿布。 $13\frac{1}{2} \times \frac{3}{8}$ E. ②白地 Sauvaguzees $14 \times \frac{1}{2} \sim \frac{3}{8}$ E. ③ Sauvaguzees=Broun 未漂白 $14 \times \frac{3}{8}$ E. ④ Sauvaguzees-Doutis $13\frac{1}{2} \times$

35	Sirsake	Sirsakas, Sirsacca. 絹綿交織, オランダ人のいう Sersukers と同種。	$\frac{3}{8}$ E. (Theil 1, Sp. 1177, Theil 4, Sp. 1434) Sersukerers. インド製絹綿交織。絹による編織り。Netteltuch と同様の織り方。7・9・13・16× $\frac{3}{8}$ ・ $\frac{3}{4}$ ・ $\frac{1}{2}$ E. オランダ人がベンガルから輸入する Sirsake と呼ばれるものと同一。発音は Ser-sake に近い。(Theil 4, Sp. 1880)
36	Tapsel	"	厚地の編織り綿布。普通は青色。東インド, とりわけベンガル製。ヨーロッパ人によりギネア海岸向けに仕向けられる最上質布の一。10× $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{5}{8}$ E. (Theil 5, Sp. 67)
37	Taquis		綿布。アレッポおよびその周辺で製織。とくにフランス向け。(Theil 5, Sp. 67)
38	Tarnatane		① Tarnatane Chavonis, 強度に目のつまった綿布。東インド製。6 $\frac{1}{2}$ × $\frac{3}{4}$ E. ② Betilles Tarnatanes ③ Mallemolles Tarnatanes. Chavonis, Betilles, Mallemolle を参照。(Theil 5, Sp. 70)
39	Terindannes	Terindains, Therindains	Netteltuch の一種あるいは薄地綿布。東インド, とりわけベンガル製。16× $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{1}{2}$ E. Netteltuch, Mallemolle を参照。(Theil 5, Sp. 94-95)
40	Tocque		Toeque. Netteltuch の一種。薄地綿布。東インド, とりわけベンガル製。16× $\frac{7}{8}$ ・ $\frac{1}{2}$ E. 厚地綿布の一種を Cambaya あるいは Korathes と呼ぶ。東インドでは帽子, ターバン用生地。(Theil 5, Sp. 201-202)

- (1) 品目欄ゴチックは『序論』(S. 16-17) で挙げられているもの。
- (2) 品目名表記がベックマンと同一の場合は, ルドビーチの欄ではこれを省略した。
- (3) a~b×c~d E. は長さが a~b Elle, 幅が c~d Elle の意。
- (4) E.(h) は holländische Elle.
- (5) E. のかわりに C. がある場合は Cobidas.

のは言うまでもないが、18世紀後半にヨーロッパに流通した綿布の全銘柄を体系的に把握する作業のための足がかりとしては、ある程度の役には立つであろう。

### ⑦ 補論

最後に、ベックマンは綿花代替原料と *Fachbogen* について補足的に触れている。まず前者について。

「近年になって、国産植物を加工して本来の綿花の代替品として使おうという試みがなされた。たいていは亜麻屑 *Werk od. Hede* から採れるのではないかと期待をつないだようである。何人かの者はこの材料 *Substanz* をきわめて白くかつ細くすることを習得したので、専門家でさえこれを綿花と見誤まるほどであったことは否定できない。このような試みは賞讃に値するとはいえ、外国産綿を排除することは困難である。というのは、亜麻 [屑] のこのような処理はきわめて厄介で費用のかかるものであり、とりわけ、これから造られる製品は初めのうちこそたとえばパルヒェント<sup>18)</sup>に似ていようともしきに、とくに洗濯を重ねると、柔かい、ふわふわした、あるいはざらざらした風合いを失い、ますます亜麻織物に似てきて、ついにはそのものになってしまうのである。近くのブラウンシュバイクの都市ホルツミンデンで、フロトー F. H. Flotho という商人がそのような [亜麻屑] 紡績場を設立した。しかし、綿織工たちはここを加工しながらない。それどころか、ヘネベルク Henneberg 伯領ズーラ Suhl のパルヒェント織工たちは、かれらがいわゆる綿 [糸] をホルツミンデンから購入したという風評に公然と反駁したものである」(S. 63-64)。

「他の人々は国内産のさまざまな植物の種毛を綿花に代えようとした。ウェストベック Westbeck というスウェーデンの僧侶はしだれ柳 *Salix pen-*

18) パルヒェント(パルヒェント)についてはルドビーナに詳細な解説がある。それによれば、*Barchent, Barchet, Barchentzeug, Parchent, Parchet* (fr. *Futaie*, it. *Fustagno*) は綿織物である。しかし、本来の組用・衣料用パルヒェントは純綿であるが、寝具用パルヒェントは綿糸に亜麻糸を用いており、したがってパルヒェントは半麻布に分類される。*Nesseltuch* や *Cotton* 等の亜麻布に似た純綿布とは、その厚さ *Dichtigkeit* と *Zwillig* (亜麻布の一種) に似ていることとで区別される。Ludovici, a. a. O., Theil 1, Sp. 1304-1309.

tandra の実毛を薦め、リアンキスト Liangquist はこれを実から繰り上げる機械を設計したりした。細い葉を持つえぞみそはぎ Weiderichs, *epilobium angustifol* とポプラの種毛も問題になった<sup>19)</sup>。シベリアではアネモネ *anemone silvestris* の実毛が利用されている。これらの材料が綿花の優れた性質を共有していると仮定しても、これらを、どんな時にも十分な量と低廉な価格で大規模な「マヌファクトゥア」に供給し、これの操業を維持し、この製品を綿製品よりも安く供給できる態勢にするのはきわめて困難である。綿花は賃銀の低い諸国からもたらされるのであり、わたくしたちはより有利な条件で産物を得ることができるのだ。国内で自生する植物はあまりに少い原料しか生産しないし、これは苦勞の多い長時間の採取によってきわめて高づく。この間にバイエルンにおいて行われた試みによると、一本のポプラが年に 40 lb の実毛を産出した」(S. 66)。

すでに前々稿で取り上げたように、18世紀まで綿をドイツに移植する試みが続けられたばかりでなく、とりわけ北ヨーロッパにおいて亜麻屑やしだれ柳、ポプラ等の実毛から綿花の代替繊維を取得しようとする努力が執拗に積み重ねられてきたことをも、いまやわたくしたちの知るところとなる。そして、綿移植の努力も、代替作物発見のそれも、挫折に終るか遅くとも18世紀末までには非現実的であることが明らかになっていたことをも。ベックマンのこの叙述は、綿材料への需要が18世紀までのうちにヨーロッパの土壤にいかにも深く根を下ろすにいたっていたかということ、あらためて印象づけるものである。と同時に、地中海地域をのぞくヨーロッパ世界において、綿花輸入代替がいかなる意味でも不可能であるとの現実認識が、いまやあらためて綿原産地域の自然的条件や賃銀水準に眼を向けさせ、工業原料の安定・大量供給を外部に仰ぐことを積極的に肯定しようとする、原料問題に対する考え方に根本的な変化が生じ

19) スウェーデンにおける綿代替作物探求の努力について、ベックマンは次のような脚注を付けている。「ストックホルムだけでも年に8—9万lbの綿を輸入している。1774年にはスウェーデンはフランスとオランダから1,1930lbの染色・未染色綿糸を輸入した。……このような損失がおそらくスウェーデンの愛国者をして代替物を求めさせることになったのであろう」と(S. 61)。

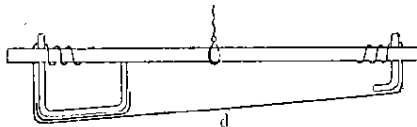
ていることを、わたくしたちはベックマンの中に窺て取ることができるのである。自然的・社会的条件の彼我の較差の認識に加えるに、暗黙のうちにこの間の遠隔地貿易における輸送生産力の上昇を考慮に入れて、自給不可能な資源を基礎とする工業の構築の可能性を、ベックマンは予感し始めているかに見える。このような意味においても、綿はかれにとって「外国物産」の中でも独自の意義を持つものとして現象したはずである。

最後に、紡績工程についての短い叙述が添えられる。

「綿工業のわたくしたちの教師であるインド人とギリシャ人は、綿を「梳いたり」kardetschen 何らかの櫛をあてることをせず、単に「絡み合わせる」fachen<sup>20)</sup> だけである。「絡み弓」Fachbogen を「ヨーロッパでは」製帽業で使用しているが、綿業では失くしてしまったことは特徴的である。というも、綿業においても「絡み弓」が有利であるに違いないことは疑いを入れられないからである。1756年にフランシャ Flachat は「絡み弓」をフランスの「マヌファクトゥア」で復活させる委託を受けた【という】が、そういうことがあったのか疑わしい。しかし、ミラノの刑務所でホワード Howard は実際に綿花を絡み合わせるのをみた【と言っている】(S. 67)。

- 20) 繊維技術における *Fach* は二様の意味を持っている。製織用語としては織物の組織に応じ綜緒によって十分に二分された経糸 (Ober-od. Hochfach, Unter-od. Tieffach) をいう。他方で *Fach*, *Fachen* はフェルト製造の準備工程で縮絨するために毛繊維を一定の形に重ねた層 (Vlies, Pelz) をも指し、これを製造することを *fachen* という。「絡み弓」は今世紀にはいってもまだ所によっては使われていた。バイオリンの弓状をした装置で弦は腸弦か細い針金からできていた。天井から吊るされ、弦を引張ると振動して堆積した繊維層に喰いこみ、繊維が浮遊して互いに絡みつき *Fach* を形成するようになっていた。参考のために図示する (第1図)。Hugo Glafey

第1図



d: Darmsaiten od. dünner Draht

(hrsg.), *Textil-Lexikon, Handwörterbuch der gesamten Textilkunde*, Stuttgart · Berlin 1937, S. 212-213. ルドビーチには *fachen* の項目が見当らず、残念ながら20世紀の資料に頼るばかりはない。

綿項目の叙述はここで終わっている。叙述の構成が整合性を欠くように、終り方もまた唐突であるとの印象は否めない。とはいえ、このような叙述方法は『序論』のすべての項目に共通するものであり、これはベックマン独特の叙述様式というほかはない。

ところで、『序論』の紹介はこれまでであるが、ベックマンが綿項目を『序論』の冒頭に据えた根拠は、少くとも綿がかれにとってとりわけ「重要な外国物産」として立ち現れた所以は、いささかなりとも明らかにすることができたと思う。ただ、ここであらためて確認しておきたいことは、筆者の当初の予想とは異り、『序論』が内容的に『技術学入門』と密接な関連を持っていることが分かったことである。そのかぎり、後者の冒頭に毛織物業が掲げられた根拠が、そのまま前者の冒頭に綿が掲げられた根拠でもあると言することができるだろう<sup>21)</sup>。後者では32の業種が扱われ、その中にはタバコ製造業や製糖業のように、原料が「外国物産」であるものも含まれる<sup>22)</sup>。しかし、その製造業はすでにドイツの地で確立しており、その製品はすでに「ドイツ物産」 *Teutscher Waaren, Landesprodukte* の範疇に属していた。これに対して綿は、綿木の移植も代替作物の発見も挫折に終わったばかりか、製品輸入代替の努力も工程によってはまだ必ずしも効を奏せず、加工技術においてヨーロッパが原産地に対して今一步及ばない最後の商品であった。『序論』と『技術学入門』を対比させて言うならば、工業的に意味のある非ヨーロッパ物産のうちでヨーロッパ商品化がもっとも困難をきわめた点にも、ベックマンは綿商品の独自性を見出して

21) 筆者が使用しえた第6版では、57ページに及ぶ毛織物業の叙述の中で3回 *Industrie* という用語が使われている。用語例①「新しい諸発明はかつての *Tuch* と *Zeug* との相違をなくし、境界線を取り払ってしまった。発明と *Industrie* に有害な制約を設けることなしに、当局がこの境界線を復活させることはできないだろう」(S. 60)。②「何人かの隣人が紡績用の羊毛を引き取るために、毎週何マイルもの距離を「マヌファクトリア」にやってくるとしたら、羨しきよりも同情の念をもって、それは極度の貧窮によって強制された刻苦 *Frugalität* であって、*Industrie* ではないとみなさざるをえないだろう」(S. 67)。③この商品 [*Tuch* と *Zeug*] は偶然、*Industrie*、詐欺、奢侈、流行によって変化し、その完全な目録[をつくること]は、庭の花のすべての亜種の完全な目録[をつくるの]と同じように不可能である」(S. 93)。*Industrie* はここでは鍵概念として取り扱われているとは言えない。

22) *Ebenda*, 7. *Tabackspinnerey*, S. 283-308; 28. *Zuckersiederey*, S. 552-579.



いたと解釈することができるだろう。

そしてまた、この困難を克服する決め手は *Industrie* をおいてないというかれの認識も特徴的であり、綿はヨーロッパ人に *Industrie* の魂を胚胎させる最良の因子と目されているかに見える。18世紀末にいたっても、綿商品だけにかぎって依然として彼我の間に技術較差が残り、これが克服されないかぎり非ヨーロッパ物産のヨーロッパ商品化の総過程は完了しない。最後に残ったこのもとも固い壁に突破口を開けるのは、ベックマンよれば *Industrie* という穿孔機によってのみ可能になるはずであった。たとえ概念的には、そのドリルはまだ十分に研ぎ上げられてはいなかったにしても。とりわけ綿工業において *Industrie* が必要とされる。したがって、綿工業をわがものにしえた時 *Industrie* は最高度に発揚し、ドイツはまさしく *Industrie* によって刻印される社会に転化するであろう。このようなものとしての綿工業の妊娠期間としての本源的蓄積過程は、ドイツにおいてもようやくにして時満ちて、いまベックマンの眼前で陣痛を迎えようとしていたのである。

### 3 ベックマン『商業学入門』(1789)<sup>23)</sup>

42項目のうちから「綿」項目だけを紹介するにとどまったとはいえ、『序論』の最小限度の分析によって、この著作が内容的に『技術学入門』と密接な関連を持つものであることが明らかになった。それでは、『序論』の4年前に公開された『商業学入門』との関連はどのようなものであろうか。

本書の構成は、序章、第1章 商業一般について、第2章 商品取引について、第3章 海外貿易について、第4章 手形取引について、第5章 銀行について、第6章 貿易会社について、第7章 破産について、第8章 簿記に

23) 筆者は第2論文の注2)で本書の書名を挙げるのみにとどまったが、この間に吉田文和氏の御厚意で本書のコピーを入手しえた。氏と、鞅旋の労を取ってくださった加来祥男氏のお二人に厚く御礼を申し上げる。ここであらためて本書の書名を表示すると以下のようである。Anleitung zur Handlungswissenschaft. Vornehmlich zum Gebrauche derer, welche sich mit Polizey, Cameralwissenschaft, Geschichte und Statistik beschäftigen wollen. Nebst Entwurf zur Handlungsbibliothek, Göttingen 1789.

ついて、附録 商業学文献目録素案、という構成をとっている。第1章の冒頭で商品の定義が行われ、第2章では商品取引について論じられているが、具体的な商品分類への言及はない。それだけでなく、ベックマンは序章で次のように述べている。「商業学と商業誌 Handelskunde は区別される。後者をわたくしはさまざまな国における商業の現状に関する知識、各国の輸出入品の知識、各国に商業のために設立された公共団体の知識、貨幣、度量衡の知識、他国と結んだ通商条約の知識、植民地や在外商館の知識等々と理解している。この商業誌は大変に広汎なものであり、多くの修正を迫られている。今のところこれはまだきわめて僅かな人たちによって特別に論述されているにすぎないが、その大部分は統計的な手引書に見出される。これは商業学の知識を前提とする」(S. 3-4)。ベックマンは商業学の著述によって理論的準備を行った後に『序論』の執筆にとりかかったようである<sup>24)</sup>。序章も含めて本文110ページのうち、30ページを第3章および第6章に割いていることは、かれの『入門』執筆の動機が海外貿易の発展に対する強い関心の生起にあることを窺わしめるものである。とりわけ第6章では、オランダ東・西インド会社のほかにイギリス、デンマーク、スウェーデンの各東インド会社の実態が触れられており、この部分はベックマンの定義からすればむしろ「商業誌」に属するものであろう。このように、本書ではたしかに海外貿易制度に関する叙述に比較的多くの紙数が割かれてはいるものの、その取扱商品については詳説されず、「植民地物産」という用語も現れない。『序論』、『技術学入門』、『商品学入門』について管見したかぎりでは、「植民地物産」という用語が使用されていないことをほぼ確認しうる。「外国物産」にあれほど強い関心を示したベックマンに、「植民地物産」の概念がまだ固まっていなかったことは、技術学の開拓者でもあるかれの眼からすれば、一次原料から高度な技術的成果でもある最終製品までを包括する

24) 『入門』と『序論』の出版とゲティンゲン大学におけるそれぞれの講義との対応関係を分析した、風巻義孝「ヨハン・ベックマン研究への覚書(1)」『商品研究』35巻1, 2号, 1985年, はし峻に富む論考である。

「外国物産」を、同一の概念で把えるにはまだ無理があったということでもあろう。このことは、かれの *Industrie* 概念がまだ成熟しきってはいなかったことにおそらく対応している、と言うことができるであろう<sup>25)</sup>。

[ベックマンの項了]

[附記]

1. 前稿で判読できなかった地名(32ページ, 上から12行目)はバナト Banat を指すことが判明した。現在のユーゴスラビア東北部からルーマニアにわたる地域で鉱物資源に富む。1718年にオスマントルコ統治下からオーストリア軍政下(1789年にハンガリア王国領)に移り、1720年代以降西南ドイツ, ロートリンゲンからの入植が行われ、入植者は「バナトのシュペーパーベン人」と呼ばれるようになった。
2. 前稿および本稿は昭和59・60年度科学研究費一般研究(C)による助成研究の一部である。

25) 附言すれば、巻末の文献目録は20部門に合計185点(重複も含む)の文献が挙げられている。ドイツ語文献が中心だとはいえ、1780年代までの商業学文献一覧としてきわめて貴重な資料である。とりわけ看過しえない点は、第19門 *Polizey der Handlung* の中でヒューム、ステュアート、モルティマーの3人の名が挙げられていることである。ヒュームについては、『政治論集』、第2版(1752)、およびその仏訳版2点(3版)(1753, 54, 55)、『道徳・政治論集』の独訳版(1754-56)、ステュアートについては、『経済学原理』(1767)およびその独訳版2点(1769-72, 70)、モルティマーについては、『商業政策・金融論原理』(Thomas Mortimer, *The Elements of commerce politics and finances*, London 1772)およびその独訳版(1781)、がそれぞれ挙げられている。ベックマンが『序論』の執筆にとりかかった時、かれがすでに『政治論集』や『経済学原理』を読んでいたことは疑いを入れない。しかしそのことは、まだ固まりきってはいなかったとはいえ、かれの *Industrie* の概念構成がやがて全面的にヒュームやステュアートのそれに負うことになろうという予断を許すものでもないのである。